

博士論文要約

出版予定—2020 年 6 月

目次

序章

1. 問題の所在	5
2. 先行研究	7
3. 本論文の課題と視角	14
4. 本論文の構成.....	16

I 総力戦と精神疾患をめぐる問題系

第 1 章 兵員の組織的管理と軍事心理学

1. 軍隊と心理学.....	22
1-1. 海軍と心理学研究	22
1-2. 陸軍と心理学研究	23
2. 戦場心理・戦争心理研究	29
2-1. 内山雄二郎『戦場心理学』	29
2-2. 『偕行社記事』における戦場心理の報告.....	30
2-3. 教育総監部における研究.....	33
3. 小括	35

第 2 章 軍事医学と精神神経疾患

1. 日中戦争以降の治療方針と治療体系	40
2. 「戦時神経症」の定義	47
3. 「皇軍」における戦争神経症の存在の隠蔽	48
4. 小括	52

第 3 章 傷痍軍人援護と精神神経疾患

1. 医療保護	56
1-1. 傷痍軍人療養所の開設	56

1 - 2. その他の療養の形態	65
2. 職業保護	66
3. 国民教化	67
4. 小括	70
Ⅱ 戦争と「心の傷」を取り巻く文化・社会的構造	
第4章 戦場から内地へ ―患者の移動と病の意味	
1. 統計から見た精神神経疾患患者の地理的布置	75
2. 戦場に取り残された精神疾患兵士たち	80
3. 「ヒステリー発生の温床」としての病院	81
3 - 1. 笠松章「戦時神経症の発呈と病像推移」	82
3 - 2. 細越正一「戦争ヒステリーの研究」	87
3 - 3. 国府台陸軍病院の軍医達の「戦時神経症」認識	90
4. 小括	92
第5章 陸軍病院と社会／陸軍病院という社会	
1. 衛戍病院・陸軍病院における精神疾患の治療	95
2. 陸軍病院と銃後社会 ―新発田陸軍病院の事例から	98
2 - 1. 新発田陸軍病院の概要	98
2 - 2. 患者の慰問	99
2 - 3. 病気を恥じる兵士と家族	100
2 - 4. 「白衣の勇士」のあるべき姿	102
3. 新発田陸軍病院病床日誌に記録された精神神経疾患	102
3 - 1. 使用する資料について	102
3 - 2. 病床日誌の分析 ―精神神経疾患患者に関する統計	103
3 - 3. 病床日誌の分析 ―発症経緯の分類と症例分析	113
4. 小括	120
〔補論〕 戦争と男の「ヒステリー」 ―十五年戦争と日本軍兵士の「男らしさ」	
1. 軍隊と「男らしさ」	124
2. 「女の病」としてのヒステリーと例外としての「男性ヒステリー」	126
3. 戦時下のヒステリー言説	130
4. 小括	135

第6章 誰が補償を受けるべきなのか？

——戦争と精神疾患の「公務起因」をめぐる議論

1. 陸軍における恩給制度	139
1-1. 恩給区分	139
1-2. 公務傷病の範囲	142
1-3. 恩給の請求手続き	143
2. 国府台陸軍病院における恩給策定	145
2-1. 「精神科懇談会」による恩給策定方針	145
2-2. 「戦時神経症」をめぐるアリーナとしての臨床	149
2-3. 「戦時神経症」の恩給策定状況	153
3. 戦後の精神疾患と傷病恩給をめぐる言説と実態	161
3-1. 戦争犠牲者に対する補償・援護制度	161
3-2. 戦争と精神疾患をめぐる国会での議論	162
3-3. 戦傷病者と恩給相談のネットワーク ——新潟県傷痍軍人会の活動	167
3-4. 戦時～戦後の恩給診断状況 ——高田陸軍病院・国立高田病院の例	169
4. 小括	172

第7章 十五年戦争と元・兵士の心的外傷^{トラウマ}

——神奈川県精神医療施設に入院した患者の戦後史

1. 終戦直後の国府台陸軍病院	179
2. 旧国府台陸軍病院入院患者の戦後	180
2-1. 目黒克己による20年後の予後調査	180
2-2. 戦後日本社会における戦争神経症の位置	181
3. 神奈川県精神病院入院記録から見た元・兵士の心的外傷	183
3-1. 使用する資料について	184
3-2. 患者入院記録の分析	185
4. 小括	192

終章	199
文献表	204
謝辞	217

序章

日本社会の中でトラウマや PTSD（心的外傷後ストレス障害）に関する共有知が形成されたのは、1995 年の阪神・淡路大震災と地下鉄サリン事件がきっかけであったと言われている。しかし近代以降の日本において、身の毛もよだつほどの恐ろしい経験をした人々が示す反応に対する関心が全くなかったわけではない。とりわけそれが集団的に発生し、関心を集めたのは、戦時の軍隊内においてである。1931 年の満州事変から足掛け 15 年にわたる戦争でこれまでにない規模の人々が戦地へと動員される中で、心理的な原因で精神疾患になったと考えられた人々は、当時「戦争神経症」「戦時神経症」（以下煩雑さを避けるため括弧は省略する）と呼ばれ、軍部や国家の関心事となった。その中で、1938 年、国府台陸軍病院が精神神経疾患となった軍人の専門治療機関となり、1940 年に精神障がいを対象とした傷痍軍人武蔵療養所が設立された。しかしながら、戦時中国家を挙げて治療体制が整えられたこの病は、戦争が終わるとともに忘却されてしまい、現代においては必ずしも戦争の公的な記憶の一角をしめるに至っているとは言いがたい。

本論文の目的は、十五年戦争期の日本陸軍における戦争神経症を中心に、戦時中から戦後にかけての（元）兵士の精神疾患を取り巻く言説や構造と実態を明らかにすることによって、戦争と精神疾患あるいは心的外傷に関する集合的記憶の不在につながる歴史的背景を明らかにすることである。

これまでの戦争と精神疾患に関する先行研究においては、様々な身体的・精神的特徴を有した男子青年たちを、均質化された「兵士」という鋳型にはめこむ徴兵制と、戦争という大規模暴力がもたらした広範な被害が明らかにされてきた。しかしながら、なおいくつかの限界が存在する。第一に、戦争神経症の顕在化と深い関連のある総力戦のインパクトが考慮されていないことである。第二に、十五年戦争期に関しては、基本的に国府台陸軍病院という一陸軍病院の史料に基づいた考察に限定されているため、患者の動態や戦争と精神疾患をとりまく様々な文化・社会的構造が捨象されてしまっており、国府台陸軍病院の特質も見えにくくなっていることである。

そのため、本論文では、（１）総力戦期において軍隊内の精神疾患への対応にはどのような特徴があるのかを明らかにすること、（２）戦時精神疾患の問題を国府台陸軍病院のみに集約せず、より広い文化・社会的構造の中で再考することを課題として設定する。

本論の構成

本論文はⅡ部構成である。序章では、総力戦下の軍隊を対象とした医療・福祉に関する先行研究を整理した上で、本論文の視角と課題を設定した。第Ⅰ部（第 1～3 章）では、総力戦期に精神の科学が戦争の遂行に関わった領域として軍隊教育・軍事医学・傷痍軍人援護に着目し、これらの場においてどのような問題が取り組まれていたのかを扱った。第Ⅱ部（第 4～7 章及び補論）では、戦争と「心の傷」を取り巻く文化・社会的構造を扱った。これらの分析をふまえて、終章では結論と今後の課題を論じた。

第Ⅰ部 総力戦と精神疾患をめぐる問題系

博士論文の第Ⅰ部では、軍隊教育・軍事医学・傷痍軍人援護の3領域において、心理学・精神医学などの人間の精神を扱う科学がどのような問題に取り組んでいたのかを検討した。

第1章「兵員の組織的管理と軍事心理学」では、欧米における総力戦の衝撃とともに日本の軍隊の中で生まれた軍事心理学の流れを、軍隊の能率増進に関わる心理学と、指揮統率上必要とされた「戦争心理学」の2つに分類して論じた。前者は兵員を「適材適所」に配置するための諸検査に応用するためのものであり、「正常な」兵員を対象としたものであった。一方、後者は戦争や軍隊生活が個人や集団に及ぼす心理的作用を軍隊の教育・訓練に応用するためのものであり、「正常」から「病理」への移行期にある兵士をも含むものであった。「戦争心理」研究においては、ある程度までの不安恐怖は、(とりわけ初年兵に対して)「誰もが経験すること」とされたが、その限界を越えた者が、次章の軍事精神医学の対象となったと言えるだろう。

第2章「軍事医学と精神神経疾患」では、これまでにない大規模な兵力動員が行われた日中戦争以降の時代に、ある程度の増加が予想された精神疾患患者に対して軍事精神医学がどのような対応を行ったのかを論じた。日中全面戦争開始後、国府台陸軍病院は精神神経疾患のための特殊治療機関と位置づけられたものの、当初国民に対しては、陸軍省医務局や病院関係者自身によって、戦争神経症の存在が注意深く隠ぺいされていた。また、国府台陸軍病院の諏訪敬三郎による敗戦直後の総括においては、戦時の軍隊において精神疾患を発症した者の大部分が、「帯患入隊者」すなわちもともとその人物は「精神病」であった、あるいはその「素質」があったのだ、と位置づけ、犯罪と関連づけて捉えられていた。

第3章「傷痍軍人援護と精神神経疾患」では、日中戦争以降拡大した傷痍軍人対策のうち、医療保護、職業保護、一般国民の教化に焦点を当て、その中で精神神経疾患がどのように位置づけられていたのかを明らかにした。原則として国家による保護は「公務に起因する一等症」の傷痍軍人を対象としたものであったが、多くは二等症であった精神疾患患者も医療保護の対象となり、「一般の精神病患者」とは異なる取扱いが必要であるとされた。ただし、精神障がい者を対象とした職業保護は、頭部戦傷者のためのものに限定されていた。

以上の分析を通じて、これら三者は発病を未然に防止し(軍事心理学)、発病した場合は病気の治療に専念して原隊復帰や「再起奉公」を目指す(軍事精神医学・傷痍軍人援護)ことで総力戦下の「人的資源」を組織的に管理することを目指すシステムであったという点では共通していたことが明らかとなった。ただし、後述のように戦場で精神疾患を発症して内地へ還送された者はかなり限定的であったため、実態としては必ずしもこのような構想が合理的に機能したとはいえない。

第Ⅱ部 戦争と「心の傷」を取り巻く文化・社会的構造

第Ⅱ部では、戦争と「心の傷」を取り巻く文化・社会的構造について論じた。

第4章「戦場から内地へ ―患者の移動と病の意味」では、まず、いくつかの統計や米軍の日本人捕虜尋問調書に基づいて、戦場で精神疾患を発症しても内地へ還送され治療や療養の対象となった者は全体から見ればごく僅かであったことや、戦地で精神疾患を発症した兵士は治療を「放棄」されたり、時には「処置」の対象となったりしたことを明らかにした。続いて、国府台陸軍病院の軍医であった笠松章及び細越正一らが発展させた、病者の移動と病像変化に関する理論を検討した。彼らによれば、戦争神経症とは戦場からの逃避や恩給への願望によって症状が固定するものであり、戦場から内地へ還送される途中に点在する陸軍病院は、後方に近づけば近づくほど「ヒステリーの温床」としての性格を強めていくものであった。

第5章「陸軍病院と社会／陸軍病院という社会」では、新潟県に存在した新発田陸軍病院を事例に、銃後社会と病院の関係や精神神経疾患患者の収容実態を明らかにした。本章での分析を通じて、新発田陸軍病院のような小規模な一般陸軍病院にも、少数ながら戦地から送られてきた精神神経疾患の患者が国府台陸軍病院を経由せずに入院していたことが明らかとなった。新発田の患者は、国府台と比べて治癒率が高く、「軽症」の患者が多かったと考えられるが、中には自傷他害のおそれがあるため受診に至ったケースも見られた。また、『新発田新聞』に見られた銃後社会の戦傷病兵に対する眼差しは、「戦病」よりも「戦傷」や「立派な死に様」に価値を置くものであり、病床日誌に残された患者の記述からは、除役（兵役免除）となることに対する経済的な不安や、兵役をまっとうできないことによって「男らしさ」が脅かされることに対する危機感が見られた。

補論「戦争と男の『ヒステリー』―十五年戦争と日本軍兵士の『男らしさ』」では、「ヒステリー」が西洋の歴史において「女の病」とされてきたことに着目し、戦争神経症という「男のヒステリー」に直面した精神医学の側が、戦時及び戦後にどのような言説を編み出していったのかを明らかにした。上述の通り、兵役免除となることは、患者や家族にとっては兵士＝男としてのアイデンティティを不安定化させる経験であったが、兵役免除の理由がヒステリーという「女の病」と通常考えられてきたものであった場合には、患者は病に倒れたことに加えてその病名をも気に病むこととなった。「男もヒステリーになる」ということは専門家の中では半ば常識となっていたが、「生来的に感情の強い」女性に多い病であるとされ、「自己中心的」で「我儘」な患者像が流布されていたからである。このようなヒステリーという病名への忌避感情のために、国府台陸軍病院では「躁病」という病名が代わりに使われることとなった。

第6章「誰が補償を受けるべきなのか？ ―戦争と精神疾患の『公務起因』をめぐる議論」では、戦時～戦後にかけての軍人恩給制度や戦傷病者に対する補償・援護制度における精神疾患の位置について分析した。戦時中の国府台陸軍病院の恩給策定方針は、戦地（「事変地」）の「甚だしく困難な環境」下で発病した精神疾患を公務起因と認める内容であった。しかし「戦時神経症」に関して言えば、公務起因の「一等症」と判定された事例も存在したが、多くは公務起因の条件を満たさなかったり、「目的反応」と疑われて傷痕疾病等差が

「二等症」と判定されたりしたため、せいぜい一時金が支払われる程度であったと考えられる。こうした病の「公務起因」を重視する方針は、戦後の恩給法や援護法にも引き継がれたと言える。国会の議論においても、精神疾患は本当に戦争が原因なのか、という疑いに当初はさらされやすかった。多くの議員らの訴えによって次第に彼らの苦境への配慮がなされたようだが、1970年代に至ってもなお補償の対象外となったであろう人々の存在も浮かび上がってきた。また、新潟県の傷痍軍人会や恩給診断書の分析によって、戦後も病に苦しんだ当事者の中で恩給の請求という行動を起こした人は恐らく少数に留まり、裁定事例も稀であったことが明らかとなった。

第7章「十五年戦争と元・兵士の心的外傷(トラウマ)——神奈川県精神医療施設に入院した患者の戦後史」では、「戦時」から「戦後」への移行と日本帝国陸海軍の解体と国家の主導する軍事精神医療と傷痍軍人援護の終焉とともに、精神疾患兵士への関心が消失していく構造と、その中でわずかに文書史料に残された戦争の傷跡について論じた。まず、目黒克己へのインタビューを通じて、戦後日本社会における戦争トラウマの忘却を促した一因として、戦後の精神医学界におけるストレス軽視の研究潮流や社会全体に戦争・軍隊への強い忌避感が存在していたことを明らかにした。その上で、当時の精神病院入院記録に残された、言語化されない、トラウマ反応として身体に残された戦争という暴力の痕跡を炙り出すことを試みた。

結論

以上の分析を通じて、本論文では、これまでの戦争史研究では必ずしも十分に活用されてこなかった医療アーカイブズを利用し、従来の先行研究で注目されてきた国府台陸軍病院だけではなく、一般の陸海軍病院や民間の精神病院、家庭など精神疾患兵士の多様なケアの場が存在していたことを明らかにしてきた。

また、本論文での第Ⅰ部で明らかにしてきたように、総力戦期の日本では「人的資源」の組織的管理に精神の科学も関わるようになり、精神神経疾患の国家的ケアがなされた。その一方で、第Ⅱ部で明らかにしてきたように、そうしたシステムに組み込まれた者はごく一部であり、戦争と精神疾患に関する言説そのものが、終戦とともに心的外傷への関心を失わせる構造を内包していた。日本が経験した総力戦と戦争神経症の問題は、近年までその存在自体が知られていなかったと言えるが、その背景として、本論文で明らかにしてきたような文化・社会的構造が関わっていると考えられる。